

そう戸惑っているうちに、あれよあれよという間に、下半身の衣服が引き下ろされていく。

（み、見られてる——！）

羞恥に耐えきれず、真白は思わず両手で顔を覆った。

だめだ。変なリアクションはするな。

神谷は仕事でやってくれている。

これは施術だ。そう言い聞かせて、精神統一するしかない。

「じゃあ、よく見えるように。膝、立てて。足、ちょっと開いてくださいね」

（む、無理……恥ずかしすぎる……！）

心の中では悲鳴を上げながらも、真白は抵抗できないまま、言われた通りに膝を立てる。

次の瞬間、腰の下に丸めたタオルを差し込まれた。

腰が持ち上がり、自然と体勢が変わる。

（――この角度……）

足元に立つ神谷からは、あられない姿が、きつとすべて見えている。

「じゃあ、シェービングジェル、塗りましようか。ちよつとくすぐったいですけど、我慢してくださいね？」

「へ、あひゃっ！」

思わず、間の抜けた高い声が出た。

自分でも驚いて、真白は慌てて口元を押さえる。

繊細な部分を、さわさわと撫でるような感覚。

ぞくぞくと、くすぐったさが身体の奥から込み上げてきて、思わず腰が逃げそうになる。

（――だめ、動くな）

そう思うのに、うまく力が入らない。

神谷は、粘性のあるシェービングジェルを、刷毛で丁寧に塗り広げているらしい。

「繊細な場所ですから、ちゃんとしっかり濡らさない」と

あくまで仕事でやっているのだ。

そう思おうとするのに、刷毛が敏感な皮膚をくすぐるたび、「んっ」と腰が跳ねてしまうのを誤魔化しきれない。真白は必死に施術着の裾を握りしめ、口元をきつく結んだ。

——くちっ。

刷毛が、鞞丸のあたりで縁を描き、そこからゆっくりと裏筋を辿るように上がっていく。

——ぞく、ぞく、ぞくっ。

「んくうっ……」

堪えきれず、また腰が揺れた。

「白石さん」

「は、はいっ！」

心臓が跳ね上がる。

反射的に、「すみません！ 変な声、出して……！」と謝っていた。

「いえ。声が出そうなら、我慢しないでいいですよ。少し、緊張してるみたいですね？」

こんなところを触られて、見られて、しかも相手はイケメンだ。

緊張するなというほうが無理だ。

「あまり急に動くと、シェーバーを当てたときに危ないので。少し、慣れておきましょうか」

「な、慣れて……？」

「はい」

にこりと、神谷が真白の股の間で微笑んでいる。

（――なに、この光景）

そう思った次の瞬間、陰茎に神谷の生温かい手が添えられた。

「え？」と声が出る前に、真白は思わず上体を起こし、その様子を凝視してしまう。整った神谷の顔。その口元が、真白の先端にそっと触れた。

「えっ?! は、ちよっ……!」

止める間もなく、真白の性器が温かく、柔らかい神谷の口内の感触に包まれる。

「んっ、う、うそっ……んあっ……」

――くちゅ、くちゅ。

上下する感覚に、真白は抗えなくなっていく。

（まって……まって……なに、これ……）

頭の中でそう叫びながらも、身体はもう言うことをきかなかった。

だって——人に口でされるのが、こんなにも気持ちいいなんて。

元カレに求められて、こちらがすることは何度かあった。けれど、してもらったことは一度もない。これが、初めてだった。

ぬるりと、神谷の舌が裏をたどり、先端の窪みをくすぐってから、強く吸い上げられる。

「んんっ……か、神谷……さん……」

まずい。

気持ちよすぎて、いってしまいそうだ。

「も、や、やめてくださ……ちよつと……このままだと……」

——ちゅくっ、じるる、ちゅくっ。

「あ、だめだ……っ、神谷さん……!!」

——じゆるる。

きつく吸い上げられた瞬間、腰が跳ね上がった。

同時に、腹の奥から、既視感のある快感が一気に駆け上がる。

堪えきれず、先端から白濁が溢れた。

解放感に息を吐いたのも束の間、何をしてしまったのかを理解して、真白は青ざめる。

（——口の中に、出してしまった）

「あ、う……うそ……すみません……！」

慌てて上体を起こし、下腹部を見下ろす。

神谷は、ちようどゆっくりと口を離すところだった。先端と口元が、一瞬、細い線で繋がって、切れ、こくん、と神谷の喉が上下する。

何が起きたのか理解できず、真白は呆然とした。

「すみません。ちょっと、やりすぎてしまいました。イカせるつもりまでは、なかったんですけど」

タオルで口元を拭いながら、相変わらず穏やかに微笑む神谷。

本当だろうか。やめてと言っても止まらなかったし、明らかに仕留めにきていた気もする。

「あー……すみません。ちょっと、勃起、落ち着いちゃいましたねえ」

どこか軽い調子で、神谷は真白の股間を見下ろした。

「これからシェービングする時、勃ってないと危ないので」

「へ……」

「ちょっと、違う方法で勃たせてみましょうか？」

「な、なに……」

「白石さん」

「……はい？」

「前立腺って、知ってます？」

ひゅつと、息を呑む。

恐怖というより、腹の内を見透かされたような感覚だった。

男性同士のセックスで、受け手を試みたことがある真白にとって、その言葉は初耳ではない。
い。

それをあえて口に出されたことで、自分の性趣向がバレたのではないかと、ひやりとした。
た。

返事ができずにいると、神谷は続ける。

「男性の、ここにあるんです」

くちり、と指が滑り、ぬめりが後ろへと塗られる。

「あっ……!!」

反射的に身を振るが、神谷は片腕で膝裏を持ち上げ、抱え込むように腕を回してきた。

「ここ、マッサージすると、気持ちいいですよ」

入り口を、くるくると撫でられて、思わず身体が引きつる。

「あ、あの……でも……俺、そこ、気持ちよくななくて」

「え？」

「あ……」

（――しまった!）

口が滑ったことに気づいて、真白は恥ずかしさから、両手で顔を覆う。

「白石さん、触ったこと、あるんですか？」